

---

# カーテンの向こう側

藍村 泰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カーテンの向こう側

### 【著者名】

N Z ノード

N1963K

### 【作者名】

藍村 泰

### 【あらすじ】

今、この部屋で行われていることは異常だ。そんなこと、私にだつてわかる。

私はただ、こちらを余すところなく観察してくる人間を凝視した。彼は好奇心剥き出しの瞳を細めると、制服のネクタイを絞めながら携帯で何かを打ち出した。私のことを誰かに言つつもりなのだろうか。いや、その可能性は低い。今、この部屋で行われていることは異常だ。そんなこと、私にだつてわかる。

濃紺の遮光カーテンがかかつてゐる彼の部屋は殺風景という単語が相応しい。四角い硝子張りのテーブルとカラー・ボックスに収まつた教科書類しか部屋には存在しない。私は様々な部屋を見てきたが、ここまで余分が削られた部屋も珍しい。

「香哉、朝御飯よ」

控え目なノックと共に、彼の母親の声がした。香哉と呼ばれた彼は、生返事をしてこの部屋を出る。救済は到底望めなかつた。母親がいる位置から私は見えない。それに加え、香哉が外出した際に彼の部屋へ立ち入る者はいない。悪条件が重なつた。どうにかこうにかして動こうと藻掻いても、一向に私は動けない。やるせない。

重く被さるカーテンの向こう側には、夏の陽射しが光々と輝いているのだろう。願わくばもう一度、それを見たいと心底思つ。

香哉に囚われて、かれこれ一週間前後が経とうとしていた。水も食べ物も与えてもらつていないので、私は、自分が次第に衰弱していくのを感じた。思考は鈍り、視界は段々と狭くなる。

その日、香哉は弱つていく私を横目見ながら小説を読んでいた。今日は休みなのだろう。外が晴れているのか曇つてゐるのか、はたまた雨が降つてゐるのかはわからない。分厚いカーテンが開かれることはない。

帰宅すると、いつも私を覗き込み、こつ言つ。

「まだ生きてる。キミも大概しつこいな」

ああ、彼は私の死を望んでいるのだ。」ちらとしても、このよう

に無様な生き恥を晒すくらいなら、すぐにでも死んでしまいたい。

私は涙を流すことが出来ないし、苦痛に歪む表情を象ることも出来ないので、香哉は躊躇なく私を実験台にしたに違いない。ただ

の興味本意だ。哀しみはなかつた。元来、私は人から大切にされるモノでないのだから、憐れみを受けずとも平氣である。だがしかし、この状況下は好ましくない。生き延びられるか死に絶えるのか、どちらつかずの状態である。

私が微かにでも物音を立てると、彼は敏感にこちらを見やる。その目は私の終焉を絶対に見逃すまいと鈍く輝いており、私はそれを見る度に萎縮する。

いつ終わるともしれないこの生き地獄は、私の強い生命力をも蝕んでいった。

朦朧とする。

私は水分もエネルギーも枯渇し果て、身動く//ジロ<sup>ぎ</sup>ー一つ取れなくなつていた。香哉は何となく、私が眠りに近きそつなことに気が付いているのだろう。食事さえ部屋で食べ、始終私を観察し続けた。

機械音が鳴り響く。無機質なその音を発する個体を香哉は取り出し、耳を押し当てる。

「もしもし。うん、うん。もうすぐ死にそうだよ。見に来る？」

「冗談ではない。私は見世物ではない。

しかし、香哉は残念極まりないといった顔で個体から耳を離した。どうやら別の人間は来ないと言つたらしい。

大体、私に興味を示すのは香哉ぐらいである。ほとんどの人間は私を忌み嫌つて、こちらに目を向けようともしない。段々と視界が狭まってきた。終わりは近そうだ。

この湿度が低い部屋などで死にたくない、カーテンの向こうにあるだろう夏特有のジメジメした世界に行きたい一心で少しだけ動い

た。だが、それが災いした。私の体は電流が走ったかのように硬直し、思考も薄れた。

「キミはすごい。その体で三週間近く生きた」「最期に賛辞を聞いた気がした。

矢上香哉は感慨深そうな顔で、自分の勉強机上に載つて いる物体を見つめ続けた。そのうち穴が空くのではと思う程に強く見つめ続けた。

突然、ノックの音がした。

「香哉、ご飯は？ 今日も部屋で食べるの？」

朗らかな母親の声に、彼はハツとして部屋の扉に向かつて叫ぶ。

「リビングで食べる！」

「あ、本当に。良かつた……お母さん近頃一人で食べるの寂しかったのよ」

母親は鼻唄混じりに階段を降りて行つた。

香哉は細く息を吐き、物体に向かつて呟いた。

「ゴキブリって、頭と胴体切り離しても一週間は生きるって聞いたけど……ホントだつたんだね。その生命力は尊敬に値するよ」

黒光りするゴキブリを愛しそうに指の先でつつぐ。

微かにそれがカーテンの方に向かつて動いたような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1963k/>

---

カーテンの向こう側

2010年10月20日20時05分発行